或問　WAKUMON　113
No.40,（2021）pp.113-126

陳春生が主筆した『通問報』についての考察

喬 昭

要旨：『通問報』は近代新聞の一つであり、キリスト教関係の新聞である。清末における時代性の特徴があり、宣教師が主任で中国人が編集長を務める状態が一般的である。しかし、今までの研究は 19 世紀の新聞に集中しており、20 世紀以降の新聞に関する考察が少ない。周知のように、清末時代の特徴が「西学東漸」という風潮があり、外国人が創刊した宗教新聞は社会的および民衆の思想への影響を与えることが考えられる。本稿では 20 世紀初期の新聞『通問報』について考察し、その特徴や創刊者の方針や工夫などを分析したい。そして、編集長の陳春生との関係（主筆した経験）や作品につながる影響を論じたい。さらに、本稿の分析でわかるように、『通問報』で連載している「以古方今」のような寓話の教訓における特徴と、陳の他の作品の教訓に共通点があることを通じて、陳の創作特徴が考えられる。また、「以古方今」は『東方伊朔』のように中国風イソップのような特徴があると推測できるだろう。これは中国の寓話とイソップの繋がりになる資料と言えるだろう。

キーワード：『通問報』、陳春生、教会新聞、寓話、西学東漸

はじめに

『通問報』は近代新聞の一つであり、キリスト教関係の新聞である。清末における時代性の特徴があり、宣教師が主任で中国人が編集長を務める状態が一般的である。赵晓兰、吴潮著（2011）『传教士中文报刊史』が清時代の宣教師による新聞を詳しく纏めている。書によると、中国最初の新聞は『察世俗毎月統計傳』というものであり、19 世紀において、様々な新聞が出版され、影響力が増やした。20 世紀に入ってからは各新聞で創刊方針などの変更があり、政治に関するものが少なくなるということがわかった。そのため、今までの研究は 19 世紀の新聞に集中していおり、20 世紀以降の新聞に関する考察が少ない。周知のように、清末時代の特徴に「西学東漸」という風潮があり、外国人が創刊した宗教新聞は社会的および民衆の思想への影響を与えることが考えられる。本稿では 20 世紀初期の新聞『通問報』について考察し、その特徴や創刊者の方針や工夫などを分析したい。

一、『通問報』について

1.1 キリスト教宣教物である『通問報』

『通問報』については『传教士中文报刊史』[1]の中で以下のように述べられている。

《通问报》是长老会于 1902 年在上海创刊的，是民国时期发行量最大的教会周刊，也是最具

[1] 赵晓兰 吴潮著『传教士中文报刊史』复旦大学出版社 2011 年、362 頁。

影响力的教会刊物之一，每个教会都会订阅。林语堂先生也曾在其自述文章中提及该报对他的影响。

该报不仅在国内发行，而且还远销到南洋以及西欧和美洲的国家，“凡华侨足迹所至之处，无不有通问报之读者。”其发行量之大、覆盖面之广可想而知。

（拙訳：『通問報』は 1902 年にアメリカ合衆国長老教会がシャンハイで創刊した。民国時代における発行部数が最高であった週刊紙（週刊の新聞）で、当時社会的に強く影響をもたらした教会が発行したものである。ほぼ各教会が購読するほど人気があった。林語堂先生にも自分の文章で『通問報』の影響を言及した。

『通問報』は中国国内だけではなく、東南アジア、西欧、アメリカ州に至るまで販売されていた。「中国人がいるところに『通問報』の読者がいないわけがない。」『通問報』の発刊部数の多さと、普及していることが想像にもできるだろう。）

『传教士中文报刊史』の中で『通問報』を以上のように紹介した。これにより、『通問報』の影響力が非常に広いことがわかった。さて、『通問報』の具体的な内容をここで紹介しようと思う。

図1

上の図1のように、新聞の最上段に位置し、もっとも目立つように書かれているもの（文字）は「通問報」という三文字の名前である。それから、各新聞の「通問報」のタイトルの下に英語の名前 *The Chinese Christian Intelligencer* と「基督教家庭新闻」というサブタイトルがつく。

そして、一番右のところに縦書きの「每禮拜出報一回」、「 以五十回爲一年」が書いてあり、一番左に「國內每份大洋三分」、「國外每份大洋五分」が書いてある。右の文は「毎週一回出版し、一年分は五十回である。」という意味で、左の文は「国内であれば大洋三分で売り、外国で売る場合は大洋五分で買える。」という意味である。ここでの「國內每份大洋三分」と「國外每份大洋五分」は上述した『通問報』の影響力を実証したと考えられる。「『通問報』が国内だけではなく、東南アジア、西欧、アメリカ州に至るまで販売されていた。」、「中国人がいるところで『通問報』の読者がいないわけがない。」と「『通問報』の発刊部数の多さと読者が至る範囲（所）にいる、という点が想像できるだろう。」などの評価が適切であることは確実だろう。また、図1の一番下に「本館开設上海北四（第一千二百二十五回）川路第一百三十五號」という文がある。これは各新聞の出刊号と出版地を表している。ここで注意すべきことは、当時代の特徴として漢字は右から読むことに対して、同じマスにある英語は英語の表記に従い、左から記入

されていることである。

以上は『通問報』の最上段に位置する、タイトルについての考察である。次に、『通問報』の内容についてこの部分では二つの例を挙げよう。内容をまとめるために、筆者は報の各欄のタイトルを整理し、以下のようにまとめた。

例 1、1924 年　第二十八號　第一千一百十一回

首論→緊要教務→遊記→詞林→戈言→家庭講話→教會新闘→譯著→新詩→證道談→教會新闘二→霏金屑玉→要電彙録→公電→中外新闘

例 2、1924 年　第三十號　第一千一百十三回

首論→緊要教務→他山之助→詞林→戈言→家庭講话→教會新聞→教會新聞二→經題講義→霏金屑玉→要電彙録→公電→中外新闘→輿論一斑

以上の二つの例から分かるように、『通問報』の組み合わせが明瞭に現れている。そして、毎週一回だけ発行することが特徴の一点である[2]。その組み合わせから見れば、タイトルの中には教会に関する内容は少なく、同じ期に二回もある場合がある。例えば、例1の「家庭講話」の次に「教會新闘」があり、また「證道談」の次にもう一度「教會新闘二」が出てくる。例 2 は「教會新闘」と「教會新闘二」が連続の 2 コマとなっている。もちろん、教会新聞と言われた『通問報』は宗教性の主旨もあるが、具体的な内容を考察したら、実際に『通問報』は教会的なニュースだけではなく、社会ニュースと政治関係や時代教案についての話も載せられている。例えば、図 2 と図 3 のように第一千零三十七回と第一千零五十八回に商品紹介の広告もある。また他にも時代的な教案など、白話小説や本の出版情報の知らせに至るまで載せられている。

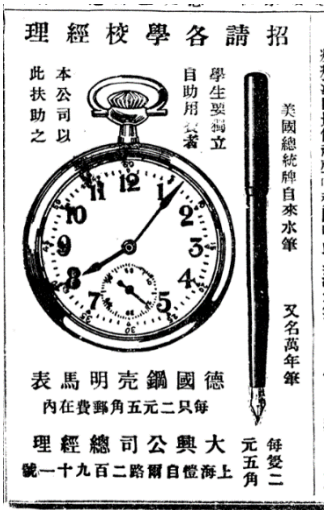

図 2 第一千零三十七回、四頁

図 3 第一千零五十八回、四頁

『通問報』についてここまで検討したように、最初は週刊誌であったが、第 181 期から改版された。同

[2] 本来は週刊誌であったが、1942 年に月刊誌に、1944 年に季刊誌に変更された。

期に「本报改良之大特色」[3]という文章が発表され、『通問報』の編集思想と主な内容について発表された。そして、1942 年に月刊誌に、1944 年に季刊誌に変更された。最後は 1905 年 12 月に停刊し、総 1819 期が出版された。ここで注意すべきことは陳春生が編集長ではなくなった 1940 年以降は出版数が激変した原因ではないだろうかと推測できる。陳春生は 1902 年から呉板橋（英：Woodbridg、日：ウットブリッジ、1856-1926）ともに上海に向かい『通問報』を創刊した。それからは呉板橋が主任として陳春生は中国向けの編集を担当した。主な編集や業務は陳が責任を持って務めていたが、1926 年に呉が逝去した。後継として主任に就いたのは金多士[4]（Gilbert Mclntosh,1861-?）という人であり、同じくアメリカ人宣教師である。しかし、宣教師の担当と言っても身体の原因で常に入院している状態であった。実際に刊の事情は全て陳が対処していた。また、陳が 1940 年に病気で逝去した[5]。陳が通問報館で働いた時期は非常に優れた業績を作っただろう。1942 年から月刊になった原因は安易に想像することができる。

現在では、『通問報』のデータが不完全なため、研究に使えるデータ情報には以下のようなものである。表 1 に基づき、『通問報』の内容と特徴を分析したいと思う。

表1

刊の回数	出版年	発行地
第 201―285 回	1906 年―1907 年	上海北京路十八號
第 309―383 回	1908 年―？年	上海北京路十八號
第 512―531 回	1912 年	上海北京路十八號
第 1035―1060 回	1923 年	上海博物院路二十號 （1047 回からは上海北四川路一百三十五號）
第 1100―1117 回	1924 年	上海北四川路一百三十五號
第 1119―1124 回	1924 年	上海北四川路一百三十五號
第 1127―1137 回	1924 年―1925 年	上海北四川路一百三十五號
第 1139―1144 回	1925 年	上海北四川路一百三十五號
第 1146―1149 回	1925 年	上海北四川路一百三十五號
第 1151―1166 回	1925 年	上海北四川路一百三十五號
第 1168―1184 回	1925 年	上海北四川路一百三十五號
第 1197―1206 回	1926 年	上海北四川路一百三十五號
第 1208―1232 回	1926 年	上海北四川路一百三十五號

[3] 『通問報』百八十一回、「首論」、1 頁。

[4] アメリカ北長老会の宣教師である。また、『教務雑誌』の編集を担ったことがある。

[5] 陳春生の生涯に関する詳細は拙文（2020）「陳春生の生涯と著作」を参照してください。

『通問月刊』（第一期～第八期）	中華民国二十一年三月十一日　第一期（1932）：何為「通問」	上海市商會商業學校通問班
『通問』（第二巻第一期～第二期）	民国廿十一年一月三十一日 民国廿十一年四月二十二日	上海市商會商業學校通問班

1.2 『通問報』の影響

『通問報』の影響については上述した『传教士中文报刊史』でも言及されたように、国内外の幅広い層の多くの読者に影響を与えた。当時では教会新聞が盛んになり、数多くの新聞があったが、『通問報』なりの特色があったからこそ人気を誇ったと考えられる。さて、具体的にどのような評価があったか、または実際の影響について検討したい。

まず指摘したいことは 1909 年に『通問報』の第三百八十回では以下のような記述がある。

> 本報緊要廣告　本報自出版以來頗為各界所歡迎除中國各行省及東三省均有人購閱外如日本高麗緬甸瓜哇紐西蘭檀香山南斐洲美國之金山英之干那大等處均有人購買既行銷愈廣是內容應愈加增本報擬自明年第一回報起加增篇幅添列門類現已蒙中國婦女傳道會同人（漢口聖公會吳監督之夫人倫敦會紀醫生之夫人南京基都會高誠身教師之夫人蕪湖美以美會葛愷悌女士）擔任女界一門又南京聖道書院教員司徒雷登君擔任勉勵會經題講義一門此外如遇有缺少訪員之處當再陸續增添以饜閱者特誌數語謹佈下忱諒為君所樂聞也[6]

以上の内容から、当時における『通問報』の読者範囲が明確に感じられる。「日本高麗緬甸瓜哇紐西蘭檀香山南斐洲美國之金山英之干那大等」という内容からアジア地域だけではなく、ニュージーランドやアメリカに至るまで普及していた。また、記述で述べられているように増刊したり、婦人伝道事情などに配慮したりする工夫が見られる。

また、1926 年の第一千二百二十一回の「書信」欄には次のような記述もある。

> ○一封勸朋友購通問報的書信[7]
>
> ▲看報二年比學校所得的知識還多
>
> 我親愛的朋友們.若要知道世界的大勢.教會的進步.信徒的熱忱.及各種屬靈的事情.請你在上海北四川路一百三十五號美化書館購通問報一份.只費大洋一元五角.就可全年每星期收到一份了.我看這報將滿兩年 所得的知識.比較我在學校所得的還多.如地理.聖經.國文.理科.歷史.衛生.農業.醫科.及種種製作的新法則.都得隨時研究.又如各種廣告登載之書籍.亦得隨時選購.這是我看報以來所得的益處.不敢隱密.要待登報申明.使還未看這報的朋友.快快的去購來看.

---

[6]『通問報』 第三百八十回「論説」、24 頁。

[7]『通問報』 第一千二百二十一回「首論」、9 頁。

長點見識.慎勿失掉這個好機會啊

滇東扎西牛坡坎福音堂佈道員楊昆玉啟

タイトルから見られるように、この「書信」は『通問報』を親友にアピールしているものである。『通問報』を 2 年間購読したら、非常に豊富な知識を得て、まだ『通問報』を知らない人に推薦したいという気持ちが溢れてきた。具体的な感想や得た知識を詳しく論述してあるので、より高い説得力があるのではないだろうか。また、新しい読者(まだ『通問報』を読み始めていない人)は報刊から購読を進められるよりも、普通の読者の感想文に共感して読んでみようと考えるようになる。

さらに、1935 年に発行された第一千六百五十八回には以下のような内容が載せられている。

我讀通問報的感想 [8]

葉欣天

當我能續讀通問報的時候, 是在十年前, 那時因為東西奔走無定住址, 兼而被經濟所困, 以致未能長期定閱, 心頗憾之, 不過偶在友朋處借閱, 每覺其味津津, 愛不釋手, 及至近來, 更如某君所說「像結了緣」似的, 在禮拜五已是開始望着明日的通問報的來到, 次日更是盼緣衣人提早送來, 可佩的是它—通問報從來不失信, 未嘗叫我失過望, 按時光降, 接到的時候即使在用膳, 甯使放下碗筷, 先行拆閱以為快, 首次看其大略, 繼則再三細讀內容, 歷來得益匪淺, 銘感無概, 最近不佞在試着寫出一點來以供同道, 微盡一分子的本分, 辱荷編者先生的垂青, 不嫌文陋見淺, 屢蒙刊載, 尤極感愧。惟願能榮神益人, 如此則吾心足矣, 茲將邇今一些閱乎本報的感想和小提議, 寫在下面, 願與諸君共加研討,

(一)「論說」欄內所刊載的大概含有發明, 提倡或改革的性質的, 盼望大家在可能範圍內去勉諸實行, 光是看看只求個「知, 」是無際于事的,

(二)每讀「他山之助」欄中的文字, 須慎重地根據聖經去辨別, 切不可人云亦云, 至遭損失, 因為在這爛內(或他處)我們不承認完全合乎聖經中的真理的

(三)「演壇」及「經題講義」最好能以熟讀, 可作主日講道的材料, 雖然不必照樣畫葫蘆, 但採取其中的精華, 以益己助人, 亦無不可,

(四)在「緊要教務」及「教會新聞」欄中, 如有好模範可足仿效的, 就要在各地該教會內勉勵仿行, 有當讚美感恩之處的, 就要同聲讚美, 若看見撒但有什活動, 那末就記着代為禱告, 求主不讓牠在教會中橫行, 需要代禱的地方或個人, 代以為一看到最好馬上實行跪下代求, 因為待閱完全了本報以後, 往往容易忘忽,

(五)報內載着的驗方, 可以介紹給患者試用, 趁便向他們傳講福音或介紹本報, 這也算是一舉兩得吧,

(六)各閱者的本教會中如有什麼新聞, 特別事故, 個人有何靈得, 或是需要代禱, 及詢問事咎……等儘可投稿本報, 以供大眾, 俾速收美滿果效, 這可說是每個閱者的義務和權利, 請勿放

[8]『通問報』 第一千六百五十八回 一千九百三十五年九月、第三十七號「論說」、3–4 頁。

棄,（以下是對于本報的小提議,）

（七）屬不關緊要的稿件, 可以用六號字排印, 或密排, 這樣, 內容材料可以加增, 而篇幅頁數仍是照舊,

（八）多招登一些正當誠實廣告, 藉減本報經濟担負, 同時閱者當努力介紹, 使萬份運動早日實現, 推銷愈廣, 廣告愈易招登,

（九）如能于每回報上印幾幅銅圖,（新聞等）及正當畫片, 我想它的銷路定然激增,

將所想到的拉雜的寫了出來, 不知愛護本報的諸君以為何如,

この「我讀通問報的感想」という感想文には更に具体的なことが書かれている。感じられたことや『通問報』の優れたところはもちろん、各欄の内容にまで細かく触れられている。葉欣天という人の日常生活に『通問報』が欠かせないような存在だと感じられる。自分の感想を書くのみならず、最後に「不知愛護本報的諸君以為何如」と他の読者と感想を交流したいということもアピールした。以上のように、葉氏が感じたことを 9 個も細かく書いた点から、改めて『通問報』の影響が感じられる。

ここまでは『通問報』の影響に関する内容を検討した。以上のような例文以外にも数多くの文章があると思う[9]。まとめていうと『通問報』は当時、宣教的なものとしてだけではなく、人々の生活に深く関わっていたような存在であった。一般庶民のみならず、知識人層の人たちにも影響を及ぼしていた。この点については当時だけではなく、近年でも林語堂が『林語堂自傳』[10]と『林語堂自述』[11]で何回も『通問報』に触れていることから、『通問報』の影響力の大きさがわかるだろう。

二、陳春生と『通問報』

2.1 陳春生が主筆とした経験

第一章では『通問報』について詳しく論じた。この章は編集長と主筆である陳春生と『通問報』について検討するつもりである。

陳と『通問報』を論じる前に、述べなければならないことは呉板橋との関係であると思う。『通問報』の創刊を一緒に経験した仲間との関わりは拙文（2020）「陳春生の生涯と著作」[12]で検討した。さて、中国人の担当者である陳と『通問報』に関する分析はまずここでは『平民月刊』という新聞での記述を紹介したい。

通問報主筆先生[13]

通問報是我教會中最老的一份報, 每禮拜出一次, 新聞很快, 言論也穩健, 通問報的主筆陳春生先生, 是一位耐勞的文人, 一天到晚做工, 不知道喫力, 他的兒子們也都在社會上做事,

---

[9] 「本报销场遍及全球」載『通问報』第 1623 期、1935 年 1 月第二号、18 頁。

[10] 李輝 主編『林語堂自傳』 大象出版社、2005 年 7 月、82 頁。

[11] 劉志學 主編『林語堂自述』 河北人民出版社、1991 年第一版、1994 年第三次印刷 11-12 頁。

[12] 喬昭「陳春生の生涯と著作」『東アジア文化交渉研究 第 14 号』 249-264 頁、2021 年 03 月 31 日。

[13] 『平民月刊』 第十卷 第五期 7 頁。

很受人們的稱讚。

陳先生喜歡穿布衣，與平民為友，正平最愛用國貨，不願買舶來品。他的言行，可以為吾們的好榜樣。

このように、『平民月刊』では陳春生について述べられている。陳は勤勉で、正義感が強い性格であった。息子たちもよく働き、人々から高い評価を受けていた。また、陳は布の服を着、庶民との関係も良好で、友達のような雰囲気である。更に愛国心があり輸入品など一斉使わないらしい。みんなの心身的なモデルのような存在であった。陳は『通問報』で働きながら他の業務も重ねて兼職していた。例えば商務印書館でも非常に重要な職務を負い、中国の映画産業の推進に貢献した[14]。

また、『通問報』の業務や業績につては陳が書いた(発表した)「二十五年開始之通問報」[15]と「二十五年來之中國教會報」[16]という文章がある。陳は「二十五年開始之通問報」では特徴を 3 点まとめた。要点は「(一)戰勝教會群報也」、「(二)二人包辦到今也」と「(三)不因時事轉移也」である。特に第 3 点に説明したように、当時では社会背景における新聞の停刊や伝刊(内容の変化)が生じやすい。このような大変な状況で二十五年も続いたことは非常に難しいというより、偉大なことに感じられるだろう。次に「二十五年來之中國教會報」では他の新聞を含めて当時の新聞事業について詳しく論じた。『通問報』がうまく続けられる原因と他の新聞の特徴などを評論していた。また、筆者の調査によると、『通問報』では頻繁に「改良」のお知らせがあり、これは陳が実際の状況に応じて工夫をしていたことが見られるのではないだろうか。

2.2 作品の連載

主筆を務めていた間に、陳が著した作品も多い。教会的なものと小説、寓話の翻訳など様々な作品がある。具体的な作品名と詳細は拙文(2020)「陳春生の生涯と著作」で言及した。本稿で論じたいことは『通問報』に登場した陳の著作である。中には広告として本を宣伝しているものがあり、内容を連載の形で載せたものもある。筆者の調査により、以下の表 2 にまとめられている。

表 2

作品名	掲載	欄目
『五更鐘』	第二百六十三回	論說(序言內容)
『強盜洞』	第三百十八回	論說(概要)
『東方伊朔』	第百九十二回	論說(序言內容)
『伊朔譯評』	第百三十回	首論(新書書名、価格)
『講道要訣』	第一千零三十六回	首論(新書紹介)

[14] 商務印書館での具体的な仕事や業務につては、拙文(2021)「「商務印書館の映画事業に関する研究 ―陳春生の経歴を視座として」『或問』 第 39 号 123-136 頁を参照してください。

[15] 『通問報』 第一千二百零一回、14 頁。

[16] 『真光』 第二十六巻 第六號 1–9 頁。

『新日記故事』	第一千二百二十九回	首論（新書書名、価格）
『西史通俗演義』	第三百四十一回	首論（新書紹介）
『滿洲聖教奮興記』	第三百十七回	首論（新書紹介）
「孽海光」	第五百三十一回	小說（二十五）[17]
「以古方今」	第一千一百二十八回	家庭講話（三十七）[18]

表 2 のように、陳の作品はほとんど『通問報』で紹介したが、資料の逸散や扱うデータの不完全さなどが原因で現段階では未解明の部分もある。しかし、中から分かることは『通問報』が陳の作品を紹介する媒介として役に立ったことであろう。また、「孽海光」のような、現在でも不完全な作品を発掘するのに非常に参考になると考える。清末小説の研究分野に資料を提供できる価値があるとも言える。さらに注目すべきことはイソップ関係の『東方伊朔』という作品があり、表 2 にもまとめたように、これは陳の作品である。内田（2014）[19]が指摘したように、漢訳イソップの分野では特殊かつ重要な地位を占めている。イソップの移遷と変容である中国風イソップという特徴を持っている。そして、『伊朔譯評』は『東方伊朔』を拡張したイソップの漢訳版である。また分析を行う際に、「以古方今」というシリーズに注目した。この「以古方今」は『東方伊朔』との関連性があると推測されるが、次の章でその内容を検討したい。『通問報』で陳の作品が載せられた情報について以下の図で示したい。

通問報
THE CHINESE CHRISTIAN INTELLIGENCER
基督教家庭新聞
A CHURCH AND FAMILY NEWSPAPER
Published Weekly in Shanghai, at 135 North Szechuen Road.
Registered at the Chinese Post Office for transmission in China.
每禮拜出報一回 以五十回爲一年
國內每份大洋三分 國外每份大洋五分
本館開設上海北四川路（第一千二百二十三回）一百三十五號
○本回報因稿件擁擠特增刊一大張共四大張閱者注意
○傳道人留意你的器具
凡人講道或演說，如道直說理，未免枯燥無味，倘於講論時，用短篇故事，或寓言一二段，不獨使聽者起興，且能使講義愈加明瞭。本館前出之「東方伊朔譯評」「新日記故事」多再版十多次，銷數萬冊，皆傳道人必用的良器具也。因該書皆有趣味之故事及寓言也。
上海北四川路協和書局發行
惜陰日記
究研的教諸
協和書局發行

通問報
THE CHINESE CHRISTIAN INTELLIGENCER
基督教家庭新聞
A CHURCH AND FAMILY NEWSPAPER
Published Weekly in Shanghai, at 135 North Szechuen Road.
Registered at the Chinese Post Office for transmission in China.
每禮拜出報一回 以五十回爲一年
國內每份大洋三分 國外每份大洋五分
本館開設上海北四川路（第一千二百二十五號）
○耶穌聖誕的好贈品
用功之教中國奮起中宗教之類人
教督基的命革
協和書局發行

図 4　　図 5

---

17 『通問報』では「孽海光」の連載について現段階では解明した記述は 24 と 25 の二篇しかない。

18 『通問報』では「以古方今」の連載については現在、データ収集の段階である。詳細は次の章で説明する。

19 内田慶市『漢訳イソップ集』 ユニウス、2014 年。

以上のように、第 1223 回の「(前略)本館前出之 東方伊朔 伊朔譯評 新日記故事 多再版十多次，銷行數萬冊，皆傳道人必用的良器具也，因該書皆極有趣味之故事，及寓言也 上海四川路協和書局發行」により、陳の作品が大人気を誇ったことがわかった。また、ここの「上海四川路協和書局發行」という部分に注目していただきたい。それは、現在判明している陳の作品の多くが「上海美華書館」の版のものだからである。そのうえ、「上海協和書局」の版本には初版が多いことより、この版については情報収集の必要があると考えられる[20]。『通問報』に関する分析は非常に貴重な資料を提供しこれからの研究に参考になるように進めていきたい。

三、『通問報』における「以古方今」

3.1 「以古方今」のデータ収集

『通問報』の内容を検討している時に、「以古方今」という物語を発見した。内容から見て、比喩の話であることがわかった。また、『通問報』における「以古方今」のデータが逸散しているので、以下の表 3 にまとめた。

表 3

回数	家庭講話:勸世短篇德育故事	掲載時間
第一千一百零二回	以古方今 18;「張盤廉不受柑」、「田子方贖養老馬」、「王覽友弟」、「甑生塵」	1924 年 5 月
第一千一百零三回	以古方今 19;「管寧割席」、「猴母報鳶」	1924 年 5 月
第一千一百零四回	以古方今 20;「張齊賢大度能容」、「晏平仲不入狗門」、「鄭子產如鷹逐雀」	1924 年 6 月
第一千一百零五回	以古方今 21;「章子厚租屋之報」、「張嘉貞不市田宅」	1924 年 6 月
第一千一百零六回	以古方今 22;「常林帶經」、「龐統非百里才」、「高鳳漂麥」	1924 年 6 月
第一千一百零七回	以古方今 23;「披裘拾薪」、「段千木踰牆避文侯」、「司馬溫公事兄如父」	1924 年 6 月
第一千一百零八回	以古方今 24;「奴僕愛才」、「鷹飽遠颺」、「子公染指於鼎」	1924 年 7 月
第一千一百零九回	以古方今 25;「羣蟻觀鰲」、「范睢為王稽關說」、「龐公遺子以平安」、「伯道無兒」	1924 年 7 月
第一千一百十三回	以古方今 26;「緹縈上書救父」、「莊周寧為生龜」、「馮異大樹將軍(後漢書)」、「省刑狀夫妻對泣」、「王濟叔不癡」	1924 年 8 月

[20] 陳春生の作品集に関する内容は拙文(2021)「陳春生の生涯と著作」を参照してください。

第一千一百十五回	以古方今 27	1924 年 8 月
第一千一百十九回	以古方今 28	1924 年 9 月
第一千一百二十回	以古方今 29	1924 年 9 月
第一千一百廿一回	以古方今 30	1924 年 10 月
	以古方今 31（欠）	
第一千一百廿三回	以古方今 32	1924 年 10 月
第一千一百廿四回	以古方今 33	1924 年 10 月
	以古方今 34（欠）	
	以古方今 35（欠）	
第一千一百廿七回	以古方今 36	1924 年 11 月
第一千一百廿八回	以古方今 37	1924 年 11 月
第一千一百廿九回	以古方今 38	1924 年 11 月
第一千一百三十回	以古方今 39	1924 年 12 月
第一千一百卅一回	以古方今 40	1924 年 12 月
第一千一百卅二回	以古方今 41	1924 年 12 月
第一千一百卅三回	以古方今 42	1924 年 12 月
	以古方今 43（欠）	
第一千一百卅九回	以古方今 44	1925 年 2 月
第一千一百四十一回	以古方今 45	1925 年 3 月
第一千一百四十二回	以古方今 46	1925 年 3 月
第一千一百四十三回	以古方今 47	1925 年 3 月
第一千一百四十四回	以古方今 47（上述の 47 番と内容が異なっているから、実は 48 番と推測できる。）	1925 年 3 月
第一千一百四十六回	以古方今 49	1925 年 4 月
第一千一百四十七回	以古方今 50	1925 年 4 月
第一千一百四十八回	以古方今 51	1925 年 4 月
第一千一百四十九回	以古方今 52	1925 年 4 月
	以古方今 53（欠）	
第一千一百五十二回	以古方今 54	1925 年 5 月
第一千一百五十三回	以古方今 55	1925 年 5 月
第一千一百五十四回	以古方今 56	1925 年 6 月
	以古方今 57（欠）	
第一千一百五十八回	以古方今 58	1925 年 7 月

第一千一百五十九回	以古方今 59	1925 年 7 月
第一千一百六十回	以古方今 60	1925 年 7 月

表 3 のように、『通問報』の中には「以古方今」の話が非常に多い。しかし、現状では全部の話を集められない状態であり、27 番以前の話と最後は何番まで発表されたのかについては判断することができない。この表は 60 番まで収集されているが以降の内容はまだ『通問報』で続いている。今のデータにより、27 番以降の話でも連続的に考察できる状態ではなく、中には「欠」があちこち見られている。この「欠」の原因は元々なかったのか、あるいは資料不足のためだけなのかを検討する必要があると思われる。また、47 番のデータが二回出てくるが、詳細を確認したら、異なる内容であることがわかった。以上のような問題点と疑問があり、イソップ関係の「以古方今」を扱う時の難しさが窺える。

3.2 「以古方今」の特徴

① 寓話の数が統一していない

陳の作品で寓話に関するものといえば、『東方伊朔』と『伊朔譯評』が代表である。この両者における特徴の一つは寓話のタイトルが 4 文字の組み合わせという点である。しかし、『通問報』に掲載されている「以古方今」には、異なる文字数のタイトルのものもある。そのうえ、タイトルの文字数が四文字以上あり、人名、動物名、植物、歴史上の出来事といった様々なものからなっている。また、上述表 3 の番号は寓話一話を示すものではなく、一つのシリーズとして認められている。シリーズ内の寓話数が異なっているが、ルールなどもないと感じられる。例えば、「以古方今 19」と「以古方今 20」には各 2 話と 3 話が含まれているという点が指摘される。

② 内容は主に歴史上の人物の逸話に設定している

内容に関して言えば、まず「以古方今」という名前から、全ての物語が昔話であるだろうと想像できる。「古」は昔のこと、「方」は比喩の意味である。このことから、「以古方今」とは、「昔の出来事を基に、今の時代に喩え話を用いて教訓を与える」、という解釈が成立する。

具体的な内容を分析すると、19 には「管寧割席」と「猴母報鳶」があり、20 には「張齊賢大度能容」、「晏平仲不入狗門」と「鄭子產如鷹逐雀」がある。それぞれ中国の歴史上の人物を主人公とし、話が展開されている。『世説新語・徳行』によると、「管寧」は魏の人であった。いつも親密に付き合っていた友達の華歆の不正を発見したため、席を隔て座るようになった。この行為は友情でも不正が生じるなら必ず距離を離せ、という教えを示している。また、「晏平仲不入狗門」も有名な話であるが、「晏平仲」という人は背が小さかった為、国のために敵国に外交で赴いた時、小さいことを皮肉られた。しかし、「晏平仲」は、自分が使命を帯びて外交のような重要な任務に携わる上で、国の皇帝といえども人の身長で皮肉を言うべきではない、と皇帝を諭した。以上のような昔話を基に作られた「以古方今」は少なくない。もちろん、タイトルから分かるように、全部が歴史上の話ではなく、「猴母報鳶」のような動物談もある。より

詳しい考察を行う必要があると考える。内容の特徴としては、主に歴史上の人物を主人公に設定する点は認められるだろう。

③　教訓における「知白子曰」

「知白子」は陳春生の自称である。陳は様々な分野でこの名前を利用して活躍していた[21]。さて、「以古方今」の特徴の一つは「知白子曰」から教訓を始めることである。ここでは具体例をあげたい。

〇勧世德育 短篇故事　以古方今（三十七）

知白子

▲晋靈公嗾獒搏人　晋靈公请趙盾吃酒.暗中伏下士兵要害他.趙盾的家臣提彌明得信.急忙上殿攔阻説.臣子陪着主上吃酒.過了三杯.就不是禮行了.説了这話.就把趙盾扶了下来.公這時叫一獒狗咬趙盾.提彌明將獒狗打死了.趙盾説道.不用人反用狗.究有甚麽厉害.於是且戰且走.提彌明殉難以死.

知白子曰.不用人反用狗.眞是靈公失敗的缘故.無怪趙盾嘲笑他.但是現今有狗反可用.人绝不可用的道理.譬如有一小人你信用他.想他明白互助的道理.他反賣主求荣.你要叫一狗看门守之.或再能任别的事.他倒反安安静静的.不見得像人欺诈百出.做出伤天害理事來呢.

▲黄耳傳害　陸機好打獵.在呉時毫客送以快犬.名叫黄耳.機後作官於洛.戯向犬説道.我家久無音信你能跑家去嗎.犬揺尾作聲答應.機就寫成一封信盛以竹筒.掛在犬的頭脖子上.犬遂沿着驿站走.直到陸機家中.陸家又作答書付筒中挂在犬頭上.仍然跑還.後犬死.殡葬處離機家二百步.叫作黄耳塚.（述異記）

知白子曰.犬有靈性.同人一般.并且信實可靠.能任重大的事.目在下寒带雪山迷路.有慈善家用犬負衣載酒.在雪山中救活行客不少.闻有一犬.因本日劳而無功.歸家後獨蜷臥屋隅.羞慚不食.這一种靈性.尋常的人且不及.黄耳犬又何能比他.

これは 37 シリーズの内容を例として挙げたものであるが、具体的な考察を行いたい。例文のように、「以古方今」の話には各話の後ろに「知白子曰」がつく。この「知白子曰」の部分で寓話の内容から得られたもの、あるいは寓話から注意すべきものを陳が指摘していた。

また、「晋靈公嗾獒搏人」と『伊朔譯評』[22]における「義犬吠盗」とが類似していると考えられる。「義犬吠盗」は寓話の内容は違うが、「知白子曰」の部分が似ている。内容は次のように述べられている。「知白子曰。世間有等僕人。往往貪圖人家一點賄賂。陷害主人。後來主人事敗。自己也弄得身敗名裂。

---

[21] 「知白子」の由来や活躍した分野の詳細は拙文（2021）「陳春生の生涯と著作」を参考にしてください。

[22] 陳春生『伊朔譯評』はイソップ寓話の漢訳版であり、上海協和書局に宣統元年に出版されたものである。

無處可容。真是狗的聰明也不如了。」これと同じように、「以古方今」の「晋靈公嗾獒搏人」は、「犬さえできることが人として、なぜできないのだろう、犬より人のほうが信じられない」、という教訓を示している。違う作品の中で同じ教訓が述べられていることは、作品の関連性や作者の創作上の配慮、かつ工夫を示すものであると考えられる。

おわりに

本稿では『通問報』という新聞の詳細を論じた。また、具体的な内容を紹介し、その特徴を検討した。『通問報』はキリスト教の宣教物でもあるが、清時代の特徴である「西学東漸」の特徴も見られる。例えば、内容は西洋のものを紹介したり、政治的な話、または時代の出来事などが掲載されたりしていた。そして、内容は編集長の陳春生との関係（主筆した経験）や作品につながる影響にも、及んでいた。さらに、本稿の分析からわかるように、「以古方今」のような寓話の教訓における特徴と、陳の異なる作品の教訓に同じようなところがあることを通じて、陳の創作特徴についても考えられる。検討した結果、「以古方今」は『東方伊朔』の模倣という視点が窺える。管見の限りでは「以古方今」は出版されていなかったが、『通問報』での連載があることにより、イソップ関連分野と陳の作品を収集するために検討する意義があると考えている。また、「以古方今」は『東方伊朔』のように中国風イソップとして位置づけができるだろうと推測したい。これは中国の寓話とイソップとの繋がりになる資料であるとも言えるだろう。